

# 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

## 1. 研究課題

環世界の人文学——生きもの・なりわい・わざ

The Studies of Umwelten: The Lives and Lived Worlds of Human and Nonhuman Beings

## 2. 研究代表者氏名

大浦康介

OURA Yasusuke

## 3. 研究期間

2015年4月 - 2017年3月

## 4. 研究目的

「生きもの」にとって「生きる」とはいったいどういう営みなのだろうか。その形態、技術、境界に着目しながら従来の人文学からの脱皮を目指すことが本研究の課題である。ドイツの生物学者ヤーコブ・フォン・ユクスキュルは、生きものの営みと、その営みがなされる世界との相互関係を「環世界 Umwelt」と呼んだ。この言葉が自然科学ばかりでなく、人文科学においても多大なる影響を及ぼしてきたことは周知のところである。ヴァイツゼッカーの『ゲシュタルトクライス』やその紹介者でもある木村敏の一連の仕事はもちろん、歴史学における環境史の活性化にも、人間と非人間の関係性を主題とする人類学的理論の深化や、近年の哲学等における「動物論」の隆盛にも、そのことは容易にみとられる。人間と人間以外の「生」の営みを同じパースペクティブで論じることを、先行者たちは試みてきたのである。本研究班でも、こうした先行研究を引き継ぎつつ、しかし「環世界」を単なる抽象概念として扱うのではなく、生きもののあり方、生きもの相互の「あいだ」や「空気」、さらにはそれらの関係のなかで生まれる技術や言説など、具体的な事象に寄り添いながら考えることを主眼に据えている。その射程は、たとえば多種多様な「生きもの」が関係する災害、開発、農林漁業、鉱業のみならず、心的生や精神病理学的事象にまで及ぶ。それは無文字の知もあわせて、「生きもの」としての人間が培ってきた生き抜くための知＝「人間力」を理解することにもなろう。近年の人間と自然をめぐるさまざまな齟齬や葛藤は、これまでの自然科学や人文・社会科学では捉えきれないダイナミズムを有している。それは、総合的な知の営みであったはずの人文学それ自体の限界を示しているともいえる。人間を、人間そのものとしてだけでなく、その境界や「界面」から捉え直すことが、かえってより深く人間を理解することにつながるのではないか。本研究の根底にあるのはそのような問いかけである。

## 6. 研究成果の概要

本研究は、「生きる」主体とその営みについて「環世界」を最大公約数的なキーワードとして考察すると同時に、それを通じて人文学そのもののあり方を問い直すことを目的として組織された。副題の「生きもの」は、ヒューマン／ノンヒューマンの主体としてのアイデンティティと両者間の境界の問題を、「なりわい」はさまざまな環境と折り合いをつけながら生きる人間の生業（農業・漁業・鉱業など）の問題を、また「わざ」はそのための人間の知恵や工夫（科学やテクノロジー）の問題を指向していたといえる。これにもうひとつ付け加えるとしたら、現代世界にあって「生きづらさ」を抱える人間の心の問題だろう。2年間という短い期間にこれらの問題を十分に論じられたわけではないが、基本文献の会読や自由発表を通じて、先行研究にふれ、一定の問題意識と理論的パースペクティブを共有することはできたかと思う。後継研究「生と創造の探求」でさらなる議論の深化を期したい。

## 15. 研究成果公表計画および今後の展開等

本共同研究は班長の任期の都合上、例外的に2年間をもって一応の区切りとしたため、紙媒体での研究成果公表はせず、本年度12月に開催したミニシンポをもって研究成果の公表に代えたい。